

イギリス某所の空軍基地その一角、突然氷河期が訪れたような目につく全てが凍てついた世界にけたたましい警報が響く。肌を突き刺す鋭い冷氣の中、それをもたらした鉄の狼が一匹立っていた。

見据える先には生きているのか死んでいるのか、半身を霜に覆われ倒れる小さな生き物。

その向こうで腕の中の少年を守るように狼に背を向け倒れるスーツ姿の傷付いた男。

男の腕の中、少年が着るツナギの下から覗く独特な光沢のあるインナーから小さな電子音が響き、仕込まれた緊急機構が起動する。

「がっ！？おえっ！かはっ…はっ…！うあ…？」

着用者が何らかの負荷により意識を失った場合、強制的に覚醒させる為の電気ショック。

体が動く限り戦わせる為だけの荒療治の激痛が少年の中心を叩き、体を跳ねさせ再起動をかける。

唐突な痛みへの生理反応で目から溢れたものを拭い息を整えながら、立ち上がった少年の顔はどこか呆けている。

近くに倒れる知らない男と小動物、その向こうで微動だにしない鉄の獣…メタルガルルモンと目が合い、園田銅磨は全てを思い出した。

銅磨が何より憎む仇、父を殺したデジモンイレイザーの息のかかった国の研究施設、軍事に適したマシン型デジモンへの進化促進の研究がなされている場所。

この施設を破壊し研究サンプルとして保管されているマシン型デジモンのデータが詰まった結晶を強奪する、敵の戦力を削ぎこちらは新たな力を手にする為の任務。

実際にはこの基地と仇の間に繋がり等なく、イギリスの戦力増強を防ぎたい一部の人間と繋がった銅磨の飼主…デジモンイレイザーが組んだ設定でしかないが。

憎い仇の野望を阻止する為と思い込まされ、他でもないその仇の操り人形として各所で破壊活動を行う兵隊、それが園田銅磨だった。

目覚めたばかりの痛む頭で記憶を手繰る、最初に銅磨は使い捨ての配下ギズモンでここから遠く離れた格納庫を襲撃、注意をそちらに向かせた。

自身は今近くに見える研究棟に侵入し結晶サンプルを入手、後はパートナーであるガルルモンを使い逃げるだけ。

その前に今倒れている男が現れた、黒い鎧を身に着けた鋭いシルエットの獣…ライドラモンを連れて。

修理工に扮していた銅磨を最初から襲撃の犯人だと確信し、尋問してくる男を排除しようと挑み、敗北した。

犬歯を剥き出し唸りながら四肢を地に着けた獣の形、低い姿勢から足元に滑り込むように接近し脚を取り優位に立つ為の銅磨の戦闘態勢。

隠していたガルルモンを飛び出させると同時の初撃はすんでのところで躲されたが次は決めるのとより速く深く踏み込み、捕まった。

直線的にすぎた動きを見切れ首に腕を回されそのまま男の体重で押さえ込まれる。

視界の端では一心同体の相棒が同じように相手のライドラモンにマウントを取られ動けず。

「このまま落ちてくれ、悪いようにはしない」

かけられた低く落ち着いた声を覚えていて、諭す響きに反してかけられる圧力は強く、完全に極められた裸紋に数秒と保たずに意識を刈り取られる確信。

最も憎む者の手先に捕まる屈辱と怒りが体の底から湧き上がった。

迸った純粋なエネルギーは覆い被さる筋肉の塊を弾く事は出来なかったが、パートナーの元に届きその力を大きく跳ね上げた。

そうしてガルルモンをサイボーグ型究極体メタルガルルモンに進化させた所で意識は途切れた。

後に何が起こったかは、進化させると同時にメタルガルルモンに投入したコマンドと今の状況から理解出来る。

銅磨が無事に生きているという一点を除いて。

「なんで…なぜこんな底う形を…」

デジモナイレイザーの一派に囚われ無様を晒すくらいなら己諸共、全兵装で自分を含む周囲を破壊させた。

危機を察した男が自分から離れようともデジモンがそれを助ける為に動くことも。

四方八方に放たれるメタルガルルモンの一斉射撃は自分を撃

ち抜き懐のサンプルも破壊、逃れようとする敵にも痛手を与える。

そして自分の死に連動してメタルガルルモンの全機能が停止、後には何も残らない筈、だった。

なのに銅磨は生きている、五体満足で。

その理由は目の前で倒れる一人と一匹が示している。

男は銅磨を抱えたままメタルガルルモンに背を向け、ライドラモンも砲撃を防ごうと間に入った。

守られた、直前まで敵対していた相手、邪悪で醜悪な存在に与している筈のそれが身を盾にして自分を守った。

「あつ…ああ…！なんで…！」

理屈に合わない現実には頭が軋む、視界が歪む、絶対にありえないのに他に説明がつかない。

自分より敵を守る事を優先した愚かな善人、銅磨の知るデジモナイレイザーの陣営にはけして存在しない人種。

デジモナイレイザーとそれに与する者は全て悪であり憎み破壊する対象、植え付けられた真実と矛盾する現実が衝突し無限にスパークする。

内から引き裂かれるように痛む頭を押さえて震え蹲るその頬に、冷たいものが触れた。

「…っ！」

不調の主を氣遣っているのか、いつの間にか側に来ていたメタルガルルモン、その硬質な鼻先が銅磨に押し当てられていた。

それは答えの無い思考のループが途切れ顔を上げた主人を見ると背中のアームを展開、発生した光の翼が空気を裂いて軽く風を起こす。

意図を察すると同時に銅磨が立ち上がる。

「ああ…今は逃げるのが優先だ」

懐にしまっていた結晶サンプル…精製済なのだろう薄いプレート状のそれを確認しパートナーに跨る。

任務はまだ続いている、どれだけ意識を失っていたかは分からないが敵が来ない内に脱出しなければいけない。

「飛ばせ！一氣にここを出る！」

この場を離れるのが最優先、倒れたままの奴等にトドメを刺す時間等ない。

メタルガルモンにはまだ残弾がある事も、無防備な人間を抹殺するのに一秒もかからない事からも目を背けて、少年は飛び立った。

「少佐殿！相原少佐殿！！」

耳元で上がった悲鳴のような声と体に加わった振動が相原の意識を引き上げる。

傷付き冷える体になんとか力を入れて上体を起こし周囲を見れば、見慣れた古巣は眩しい銀世界に変わっていた。

全力で異常を告げていた警報は既に止み、状況把握の為だろ

う、相原を起こした青年以外にも複数の兵が行き来している。「すぐに担架が来ます、じっとしててください」

「全面凍結…流石は究極体だな…、ごほっ」

青年の言葉が届いているのかいないのか、満身創痍の体に鞭打って立ち上がる。

捕らえていた少年とその相棒の姿は既にある。

任務に失敗するくらいなら、おそらくはそんな思考で最高火力での自害を選んだ敵。

それを庇うという不合理に巻き込んだ相棒は、自分を起こした青年の連れらしいトイアグモンに介抱されていた。

「生きていてくれたか…」

「ギリギリだけどなう…」

トイアグモンのものだろう、相原の近くにも置かれていた熱を発する炎型のブロックが弱りきって震えるチビモンを暖めている。

メタルガルモンの一斉射撃、ともに受ければ塵も残らないが全弾がこちらに向かっていた訳ではなかったらしい。

標的を凍結させ粉碎する弾丸は全方位にばら撒かれたのだろう、至る所が破壊され凍りつき巨大な氷塊が乱立、人の行き来と作業を妨げている。

集中砲火にならなかつたお陰でライドラモンの雷撃である程度は相殺出来た、それでも甚大なダメージを受けたライドラモンはチビモンにまで退化、相原共々意識を失った。

少年とメタルガルモンの姿がないという事は彼等は逃げたのだろう。

痛む頭に手を当て思い出す、突然基地内に出現したギズモン達、操る人間も向かう先もなく、目につく全てを破壊するだけのマシン群は明確に囃。

本命は反対側にある研究棟とそこにある結晶サンプルと判断、ギズモンを処理した足で向かった研究棟から出てきた彼を襲撃犯と直感した。

日本人：高校生ぐらいだろう、少年から青年への間の時間、成熟しきる前のあどけなさや硬質さを併せ持った彼。

どこか張り詰めた姿は戦闘に入ると一変した、傍らのパートナーデジモンと同じ獣の構え、目には剥き出しの憎悪。

まともな精神状態でないのは一目で分かり、何者かの干渉を受けた結果なのも察せられた。

相原達が一手遅れた程に早い自害の選択と実行も壊された心が成せる物だろう。

操り人形に覚えた憐れみは敵を庇う理由にならないし、結果意識を手放すなどそのまま殺されても仕方ないのだが。

それでもまた同じような事があれば性懲りもなくやってしまうのだろう、直せない自分の性にせめて次は上手くやろうと決める。

感傷を切り上げた相原は後ろで落ち着かない様子の青年に振り返った。

「治療はありがたいが先にすることがある、管制室に繋いでくれ」

連絡を見越していたのか相原の名前を聞くなり管制室のオペレーターが司令に繋ぐ。

無骨な通信機越しに突然の襲撃にも揺らがないう柔らかな男の声が響いた。

「無事で何よりだ少佐、恩人に何も返せず死なれては寝覚めが悪い」

空軍基地のここで求められるのは空を制する力、デジモンも空中戦に向いたものが求められる。

空高くにあってこそその強さ、それは突如として基地内部に出現し数と強烈な射撃で上を押さえ相手が飛び立つ事を許さないギズモン達相手には余りに分が悪い。

以前所属していた縁もあり、アーマー進化のデータを提供しに訪れていた相原とチビモンがいなければ排除には手間取った事だろう。

「恩を返せていないのはこちらの方です：まだ働かせていただきます、研究棟の結晶サンプルと離脱した敵はどうなっていますか」

「サンプルについては先程報告があった、研究室にもデジモンが現れ奪われたそうだが、それを持っているだろう襲撃者は既に海上：正直奪還は不可能だろうな、一応無事な者達で追撃隊は組んだが参加するかね？」

「ええ、ですが追いつくのは不可能なのでここからやらせていただきます、サテライトのデータをチビ：サジタリモンにください」

ライドラモンとマグナモン、チビモンの進化に空を駆ける事の出来るものはあるが、大きく負傷した体では速度は望めない。

彼方の空を行く目標を撃つのに残る選択肢は超長距離狙撃を可能とするサジタリモンだけだ。

「立てチビ、一発だけ撃ってもらおう」

「守ったり撃ったりどっちなんだよ……っ！」

悪態をつきながらも立ち上がったチビモンの体が一瞬で膨らみ、より人間に近いシルエットの小竜ブイモンに変わる。

「デジメンタルアップ」

相原の掛け声と共にその手の中の小型端末デジヴァイスが光ると頂点に羽が生えた金色の卵型…希望のデジメンタルが飛び出し光と共にブイモンを包む。

膨れ上がったそれが弾けると鎧を纏った騎兵を思わせる半人半馬の巨体、サジタリモンが降臨した。

「……っ！」

傷付いた体には自身の重みすら負担なのか、一瞬膝を着くが立ち上がる。

依然呼吸も荒く、力強さより今にも崩れ落ちそうな脆さを感じさせるその姿。

思わず駆け寄ったトイアグモンは不安げな目で自身のティマーとサジタリモンを交互に見つめ。

負傷を押して動く相原達、指示を求めるパートナーの目に見守るだけだった青年も声を上げた。

「狙撃なら我々が役に…、お二人の負担を減らせると思いますが」

白く染まった大地から大きな楕円が浮き上がる、戦闘より遊

覧にでも向かうようなゆったりとした速度。

大きなプロペラと尾翼を備えた飛行船、ブリンプモン。

トイアグモンが進化したその機体の天辺に相原達は立っていた。

「高空での安定した足場か、ありがたいよ」

「本機は各種観測能力を強化してありますので、各サテライトとリンクすれば狙撃に必要なデータはほぼ賄えます」

飛び道具は標的との間に距離や高低差がある程当て辛くなる、利点は見出せなくてもないが命中率に関してはデメリットが勝り、可能な限り水平での射撃が好ましい。

飛び去る相手を狙うのに近い高さで地上と同じように踏ん張り、利く足場を用意出来るならこれ以上はない。

青年とブリンプモンに礼を言って相原がもう一度デジヴァイスを握る。

「デジメンタルアップ…クラック」

再びデジヴァイスが放った光はそのままサジタリモンの両の籠手に吸い込まれる。

進化ではなく技や機能を付与する単純な追加データとしてのデジメンタル。

「こここの成果の一つだな、マシーン型の解析を進めると同時に対抗策も講じた、機械的特徴を持つデジモンへのウィルスであり…そのデータが詰まったサンプルの破壊プログラム」  
標的は飛び去る敵でなくそれが持ち去った進化結晶サンプル守って来た物を破壊すると躊躇いなく言い切る姿に青年の顔が僅かに歪んだ。

「サンプルを…破壊するのですか？」

「俺の落ち度で奪われたのだし申し訳なく思う、打てる手がこれしかなくてな…敵に利用される事だけは防ぎたい」

「……元より我々の力では蹂躪されるだけでした、今も少佐殿を補佐する以外の事は出来ませんプリンプモンからサジタリモンへのデータリンクを始めます」

「助かる」

感情を飲み込んだティマーの言葉を受けたプリンプモンがその機能の全てをサジタリモンのスポッターとして稼働させる。視界が広がり、遠い海の上を飛ぶメタルガルモンの存在を捉えたサジタリモンがその手から生まれた棒状の発光体を弓につがえた。

「カウント開始、10…9…8…7…」

射手が呼吸を整える為のカウント、プリンプモンによるそれが終わると同時にこの戦闘最後の一撃が放たれた